

春の選抜高校野球甲子園大会出場に大きく影響する秋の東北大会が先月行われた。結果は、優勝が仙台育英高校、2位が東北高校、3位に聖光学院高校と能代松陽高校だった。この結果を見て、やっぱり仙台育英かと思う人が多いことだろう。

だが、須江航監督は、夏の高校野球甲子園大会において初の全国制覇を成し遂げた約1週間後に次のように話している。「みなさんは、『秋も仙台育英が勝つ』みたいに言ってくれますけど、僕はそう思っていないから。甘くないです、高校野球は」

結果から言えば、仙台育英は秋の東北大会を制した。ただし、ぶっちぎりで勝ったわけではない。どちらかといえば、薄氷を踏む勝利ばかりだった。まず、県大会では決勝で東北に1-2で敗れている。東北大会でも全て接戦だった。

チームとは生き物である。豪華なタレントを揃えているといっても、メンバー構成が変われば野球も変わる。仙台育英は、夏、全国の高校の中で最後まで試合をした。さらには、大会後には体調不良者が複数出たため新チームの始動は9月3日である。県大会の初戦は19日だった。万全な状態で大会に臨むには時間が足りなかった。

須江監督は、この夏、高校生の成長曲線をまざまざと見せつけられたという。「実は、聖光学院さんをモデルケースにチームづくりをしようと思っているんです」

昨年の夏、予選で敗れ甲子園出場を逃した両校は、8月に練習試合を行った。試合は仙台育英が大勝したが、須江監督は聖光学院の守りが洗練されている点を見逃さなかった。現に秋の大会ではエースが安定し、守備も10試合でエラーはわずか6だった。打線を見事にカバーし、選拔出場を果たした。

そんな投高打低のチームが、夏の予選では強打を身につけ、甲子園では日大三、横浜、敦賀気比、九州学院と名だたる強豪を撃破しベスト4まで勝ち上がった。直接対決となった準決勝では仙台育英が大差をつけたが、須江監督は聖光学院の歩みに敬意を表している。須江監督は、次のように言っている。

「こういうチームづくりがあるんだと思い知らされたんです。秋はそれまで鍛え上げてきた守りで戦って、冬は課題のバッティング練習に徹底して取り組んで、ひと回りもふた回りも大きくなったじゃないですか。春から夏にかけての聖光さんは見違えるようなチームになりましたよね。あの成長を見させてもらったからこそ、うちも現時点の力を見極めて秋に臨めたところがありました」

うれしいではないか。東北地区の強豪校同士が、切磋琢磨している。ここに東北高校も復活してきた。調べてみたら監督が代わっていた。同校OBで元プロ野球選手の方だった。指導方針がいい。自分のことは監督ではなく、ヒロシさんと呼んでもらう、怒らない、丸刈り廃止、練習中にBGMを流す、練習着はユニホームでなくてもOK、暑い日はTシャツ、短パン、攻撃開始前の円陣廃止などである。

こうしてみると、随分と自由な感じがするが、乱れていた寮生活の見直しも行っている。11年前の震災を知らない選手が多いことに気づくと南三陸町に全員を連れて行った。決勝戦の仙台育英戦、試合前にナインに告げた。「ここまでこれたのはみんなの力。自由にやってください。僕は寝てます」

高校野球は、ますますおもしろくなりそうである。そこには、指導者の存在がある。